

第四十五回 「全日本中学生水の作文コンクール」 岐阜県優秀作文集

# 水について考える

主催 水循環政策本部、国土交通省、岐阜県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、

経済産業省、環境省、

独立行政法人水資源機構、

水の週間実行委員会、全日本中学校長会

## 「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、ご両親、ご親族、先生方から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について考えていただくという趣旨で、水の日・水の週間の行事の一環として実施しています。

今年第四十五回を迎え、国表彰として一作品が入選した他、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を選定しました。

この四作品を優秀作文集としてとりまとめ、岐阜県のホームページに掲載します。

いずれも水に対する真剣な思いが伝わってくる作品です、ぜひご一読ください。

## 「第四十五回全日本中学生水の作文コンクール」(※岐阜県分)

### 一. 応募要領

① テーマ 「水について考える」(題名は自由)

② 対象 中学生(令和五年度に岐阜県内の中学校に在学中の者、または岐阜県内の義務教育学校の7～9年

次に在学中の者)

③ 原稿 四百字詰め原稿用紙四枚以内、日本語により表記されたもの

④ あて先 岐阜県都市建設部水資源課

⑤ 募集締切日 令和五年五月八日

⑥ 版權等 ・ 応募作品は個人作品に限ります。

・ 応募作品の版權は国土交通省及び岐阜県に帰属します。

・ 応募作品は返却しません。

二. 応募状況 応募学校数 四校、 応募総数 九十四作品(一年…0作品、二年…三十三作品、三年…六十一作品)

### 三. 審査

審査 応募作品を岐阜県で審査(地方審査)し、五作品を中央審査対象作文として国土交通省に推薦しました。  
中央審査における入選以上の者を除き、岐阜県表彰受賞者を選定しました。

目次

国表彰（中央審査）

【入選】

『当たり前前とは？』

川辺町立川辺中学校

三年 木下 真心（きのした こころ）

岐阜県表彰（地方審査）

【最優秀賞】（岐阜県知事賞）

『この川を未来へつなげるために』

川辺町立川辺中学校

三年 栗本 愛佳（くりもと まなか）

【優秀賞】（都市建築部長賞）

『川を守り自然をつなぐ』

川辺町立川辺中学校

三年 小田 惣（おだ いこい）

【優秀賞】（水資源課長賞）

『水力発電と水』

川辺町立川辺中学校

三年 小田垣 理子（おだがき りこ）

『当たり前とは？』

川辺町立川辺中学校 三年 木下 真心

私達がいつも飲んでいる「水」それは私達が生きるうえに最低限必要な要素であり、尊く、儂いものです。私が水の大切さに気づくことができたのは、水の不足に苦しむ人々について知ったからです。

私が小学五年生の頃、父の仕事へついていき、中国へ行きました。父が働く都市部では、ビルが建ち並び、パレードのような行事でたくさんのお水しぶきをあげるほど、不自由なく豊かな生活をしていました。町行く人もきつちりとしたスーツ、少し派手なワンピース、どこから見ても生活に困っている様子はありませんでした。そこで私は父に、

「裕福な人が多いんだね中国って。町並みもきれいだし、住みやすい国だね。」

と、感じて感じたことを素直に話しました。すると父は、私が思ってもみなかったことを中国の町並みを見つめ、私に言いました。

「中国の都心部は、きれいで華やかな町だなあ。でも、田舎のほうがそうとも限らん。明日行ってみるか。」

父はそう言い、実際に自分で見て体験した方が記憶に残り、理解しやすいだろう。と私を翌日、都市から少しはなれた町へ連れていきました。父に田舎はきれいで華やかとは限らないと言われても、自分が日本で住んでいる町よりも、大きく発展した町を目の当たりにして、「田舎は発展していない」という事実をそう簡単に理解できるはずもなく、半信半疑のまま、父についていきました。

一時間ほど、車に乗っていると、しだいに道が安定せず、ガタガタとゆれ、建物が少なくなりました。しばらくし、目的地につくと予想外な光景が広がっていました。そこには、乾燥で水がかれ、ひび割れてしまった畑、なくなってしまう川などがありました。現地の人に父が話を聞くと、

「水はかれ、作物が育ちにくくなってしまった。都市の子供達が勉強している間、この子供達は水を探しに行っている。」

と書いていました。そして、水不足や食料不足により、治安も悪くなっ  
てしまっていました。正直、そのような土地に行くことはとても怖かったけれど、水が枯れた土地や、食料、水を求める人々を実際に見ることができて、より、蛇口をひねったら水が飲めることや、豊かに作物が育つことは、とても大切でありがたいことだと気づかされました。

都市部へと戻り、楽だと思っていた車での移動や、簡単に店などで出される水は、ただ便利だと感じることはできなくなりました。そして、少し時間が過ぎた頃、父に、

「ああやって、どんなに裕福に過ごしている人が多くても、細かく見てみれば、自分達の当たり前が、一年に一度ぐらい、たまたまやってきて得られる人がいるんだな。」

と言われ、「当たり前」がどれほど貴重なものを理解しました。

私達があまらずほどに使っている「水」。私達がこぼしたり、残したりしたその一滴は世界の誰かが死にもぐらういで得た水の量と同じかもしれない。誰かが大切なものを捨てても飲みたかった一滴かもしれない。そんなことを心におきながら、「当たり前」を大切に生きていきたいです。

『この川を未来へつなげるために』

川辺町立川辺中学校 三年 栗本 愛佳

私が住んでいる川辺町には飛驒川という川が流れています。飛驒川は木曾川水系の一級河川で、岐阜県高山市、下呂市、加茂郡白川町、加茂郡八百津町、加茂郡七宗町、加茂郡川辺町、美濃加茂市を流れ、後に木曾川本川に合流します。高山市高根町の飛驒山脈の乗鞍岳南麓を水源とし、幹線流路延長百四十七・五キロメートルの木曾川最大の支流です。

そんな飛驒川を、私は小さい頃から見てきました。春になると川沿いに桜が咲き、夏になると飛驒川から水上花火が打ち上げられ、秋になると落ち葉が波に揺られ、冬になると辺り一面真っ白な中ゆっくり流れる飛驒川。一年中、飛驒川を見てきました。学校行事でも、カヌー体験で飛驒川を使ったりしました。

また釣りも盛んです。イワナやヤマメ、アユなどの川魚が多く釣れます。そんな飛驒川を、私はこの先も守り続けていきたいと思いました。そこでそのために私たちに何ができるのか考えました。

一つ目は、ポイ捨てをしないことです。昔はあまり見ませんでした。最近をよくゴミが落ちていたり、近くに公園があることもあってか、風でとばされたゴミが川に浮いていたりします。ゴミがあることによって川が汚れるだけでなく、今いる生き物たちの未来がなくなるかもしれません。だから、ゴミは自分で持ち帰ったり、飛ばされたりしないよう、しっかりと管理することが大切です。

二つ目は、家庭で意識することです。例えば、油污れなどは紙で拭いてから洗ったり、みそ汁や麺類のつゆの残りなどを流さないようにしたり、シャンプーや洗剤などを使いすぎないようにすることも大切になってきます。川の汚れは、自然の中で流れていくうちに川の中の生き物、バクテリア・ハミューバなどの目に見えないような小さな微生物などによって分解

されてきれいになっていきます。しかし、川の中に汚れがたくさんはいると分解しきれずに、川は汚れていきます。そうならないためにも、各家庭で意識することが大切になってくるのです。

三つ目は、飛驒川の良さをもっと色々な人に知ってもらう機会をつくることです。川辺町では飛驒川を利用した行事も多くあります。川辺町を象徴する川でもある飛驒川をもっと広めたいです。そのために、まずは川を今以上にきれいにし、川辺町に訪れた人が思わず足を止めるような川にすること、また、きれいにするための取り組みも発信することで町民から愛されている川ということを伝え、それにもなったポスター作りとすることもしていききたいです。

このように、私の住んでいる町、川辺町を流れる飛驒川を、未来へとつなげていきたいのです。そのために、自分に何ができるかを考え、実行し、結果へとつなげたいと思います。そんな飛驒川は、今も太陽の光を浴びてきらきらと輝いています。

川辺町立川辺中学校 三年 小田 憩

「水質汚染」というのが問題になっている。大量に捨てられたゴミなどによって、水質が変化し、川が濁ったり、飲む水や私たちが普段口にする魚などから人間に害を及ぼしたりするものだ。

二年ほど前、私は水族館に行った。国語の授業で、新聞を書くという課題があったためそのネタ探しも兼ねて見ていたのだが、そこで水質汚染の問題があり、興味を持った。河川や海に捨てられる大量のゴミによって、魚に害を及ぼし、それを私たちが食べることで人体にも害が出てしまうという内容だった。実際に、現在水質汚染が原因で死んでしまった魚の写真や、魚の胃の中から出てきたゴミが展示されており、とても悲しくなると同時に、これについて調べて記事にすることにした。

調べてみると、水質汚染によってアザラシやホッキョクグマなどの大型哺乳類の生命が危険にさらされていること、池や川などの水を利用する人々がおり、その不衛生な水が原因で毎日約一八〇〇人もの子供が命を落としてしまっている現状があることが分かった。現在、日本では約一千万人がいまだに汚水処理施設を利用してきておらず、生活処理水を未処理のまま河川に放流する地域が多くあるようだ。水質汚染の主な原因はそのような生活排水やゴミのポイ捨てであり、私たちにもできることは多くある。

例えば、食べ残しを減らす、プラスチックゴミの利用を減らす、残った油は再利用するなどだ。食べ残しを減らすことで生活排水を、プラスチックゴミを減らすことで川に流れてしまう有害物質を、それぞれおさえることができる。また油は再利用することで川の汚れを減らすことにつながる。これだけのことが私たちにもできて、その私たちができることによってはきれいな水が守られていく。自分たちの行動一つで、日本の自然が守られると思うととても誇らしい気持ちだし、反対に何も気にしていなかったささ

いな行いが、川を汚す原因になっていたことがすごく怖かった。私は調べ学習を通して、川の汚れる原因は私たち自身であること、私たちにできることは多くあり、それだけでも水質汚染はおさえられることが分かった。そのうち私が行っている取り組みはほんのわずか。改めて自分の生活について見直していこうと思った。

私が住む町を流れる飛騨川は、テレビに取り上げられ、すごくきれいだとほめられていた。また、岐阜県の誇る「鮎」も、きれいな川の多い岐阜だからこそ、多く育てられている。もし、これらの清流が水質汚染で汚れてしまったら。飛騨川も観光として伝えていけないし、鮎だっていなくなってしまふ。清流がある素晴らしさでもしそうになってしまったらという未来の想像に嬉しい気持ちとゾツとするような気持ちの交ざった変な感情をもった。

私たちの町から、岐阜から、きれいな川がなくなったとき、私たちに残されるものは何だろうか。きっと多くはないはずだ。自分たちができる水質汚染の取り組みで、今ある町の岐阜の、自然という宝を、この手で守っていきたい。それが、未来を明るくするピースの一つではないだろうかと思ふ。

岐阜県表彰優秀賞(水資源課長賞)

『水力発電と水』

川辺町立川辺中学校

三年 小田垣 理子

私が最も尊敬する人物、アルベルト・アインシュタインはこう言いました。  
「人は、海のようなものである。あるときは穏やかで友好的、あるときは

しくて、悪意に満ちている。ここで知っておかなければならないのは、人間もほとんどが水で構成されているということです。」

岐阜県には海がありません。しかし豊かで澄んだ川があります。私の住む川辺町には飛驒川が流れていて、中学校のすぐ後ろにも飛驒川が流れています。だから、全国的にも珍しいボート部があります。都会では体感することができない川の恵みを私は味わっています。例えば先ほど述べたボート部は川がないと活動できないし、山に囲まれている町なので水も綺麗だから生態系も守られています。ビルが並ぶ都会で、この風景を見たり感じたりすることは絶対にできませんでしょう。

さらに川辺町には水力発電があります。父も数年前までそこに勤めていました。父は中部電力に勤めているので、水力発電のスペシャリストです。私は父からよく水力発電の仕組みや良さを小さい頃から聞かされてきました。その頃は聞き流していましたが、この作文を書くにあたって、父に詳しいことを改めて聞くことにしました。

まず水力発電は、高いところに貯めた水を低いところに落とすことで生まれるエネルギーを利用して水車を回し、その水車につながっている発電機を回して電気を生むというしくみです。水力発電の良さは世界で問題になっている地球温暖化の原因・二酸化炭素を全ての発電方法の中で一番排出しないことだと父は言います。そこで私はひとつの疑問が浮かんできま

した。

「もっと水力発電所を増やせば良いのではないか」

しかし父は首を横に振りました。ここで出てくるのが二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災です。この震災で福島第一原発所が甚大な被害を受けました。水力発電は、生み出す電気の量が少ない一方、大量の水を使用するので非効率かもしれません。しかし火力発電や原子力発電所は莫大な電気を生み出せます。だから都会に水力発電を設置することが難しいと父は実感したそうです。さらにビルがぎゅうぎゅう詰めになっている都会にダムを設置する場所はありません。その土地によって最適な発電方法が用いられていることを知ることができました。

中学校の水道に「ダムの貯水量が少なくなっています。節水しましょう」という貼り紙があります。私にもできることがあるんだと嬉しくなりました。人間の六〇％は水でできています。再生可能エネルギーではあるものの水は有限です。少し蛇口を閉めるだけで私たちの次の世代にも綺麗な水を残すことができます。冒頭のアインシュタインの言葉を大切にして水を大切にしたいです。水力発電の良さを知ることができたので、知るで終わるのではなく何らかの形で発信していきたいです。